

# 翻訳イクバル著『忘我の秘義』その(1)

片岡 弘次 (大東文化大学名誉教授)

## Translation of Iqbāl's *Romūz-e Bikhodī*, No.1

Hiroji KATAOKA

### 要旨

イクバル (1877～1938年) が1918年、二番目に出した詩集『忘我の秘義』(ペルシア語) はこれより3年前に出した『自我の秘密』(ペルシア語) の拡大されたものであり、関係がないものとは言えない。

『自我の秘密』の中では個人の自我、個性が強調されているので、人々にとってはイスラーム共同体の存在が失なわれたように見えた。しかしイクバルは忘我は実際には自我の一部であり、自我が完成され拡大されたものと考えている。

この考えのもとで、イクバルはこの『忘我の秘義』の中で、個人とイスラーム共同体との相互関係、関係の強化に光を当てている。さらにイスラームの歴史の中で、イスラームの自由と平等の思想、人類間における友愛にも言及している。

この『忘我の秘義』の翻訳は4回で完結の予定である。今回はこの詩の性格を語る忘我の秘義の説明とその後続く第I章より第VII章までの部分である。

### 目次

#### 忘我の秘義

#### イスラーム共同体へ奉納

第I章 個人とイスラーム共同体との相互関係。

第II章 共同体は個々人の集合と混合で生じ、その育成の確認は預言者を通じて完成する。

第III章 イスラーム共同体の基本的な五柱の第一の柱：神の唯一性。

第IV章 絶望、悲しみ、恐怖はすべての悪の根源である。それらは人間の生活を破壊する。だが神の唯一性こそがこれらの精神的病状を治療するものである。

第V章 矢と刀剣の会話。

第VI章 ライオンと皇帝アラムギールの物語 (皇帝に神のご加護がありますように)。

第VII章 イスラーム共同体の基本的な五柱の第二の柱：預言者の使命。

## 忘我の秘義

(1) 忘我の獲得に努力せよ、自らを得よ

(2) それを急げ、アッラーはよく知っている。

(3) モウラーナー・ルーミー

## イスラーム共同体へ奉納

もしわたしが愛の話をしたら、おまえは拒否するべきでない

(1) もしわたしが陶醉しなくても、ほかの誰かが必ず陶醉している。

(2) ウルフィー

### I

1. (1) 至高神は (2) そのすべての民族に封印をした  
(3) おまえの上のすべての (4) 始まりを終らせた。
2. (5) おまえの清純な人はかつての預言者のようである  
おまえの (6) 心を痛める人たちの心のかがり職人である。
3. 現代のムスリムよ、おまえの目は (7) キリスト教徒の美女に向いている  
おまえは (8) カアバの道から遠く離れてしまった。
4. (9) この空はおまえの道の埃いっばいの土埃りだ  
(10) 「おまえの顔は世の人にとり芝居小屋だ」
5. おまえは波のように (11) 足裏に火がついているようだ  
(12) 「おまえはどこへ物見に行くところだ」
6. おまえは (13) 蛾より燃える秘密を学べ  
(14) おまえは火花の中に宮殿をつくれ。
7. おまえは自分の命の中に愛の基礎を置き  
預言者ムハンマドに対し (15) おまえの契約を新たにせよ。
8. わが (16) 心はキリスト教徒との交友にうんざりした  
おまえが (17) 顔の覆いを上に上げた時から。

(1) 霊的認識の獲得。

(2) さもないと機会が逃げてしまう。

(3) ペルシア文学最大の神秘主義詩人(1207-73年)。

(4) 自分の個性と自我の確立のために、他の者の愛の主張から引き下がる準備はある。

(5) 本名ムハンマド・ジャマル・ウッディーン(1555-1591年)のペルシア詩人。

(6) アッラー。

(7) イスラーム共同体に属するすべての民族に対し、宗教を完成し、これ以後、新しい宗教を示さないこと。すなわち預言者ムハンマドが、宗教の最後の預言者であること。クルアーン第5章3節参照。

(8) イスラーム共同体を指す。

(9) 新しい宗教を示し、新しい預言者を示すこと。

(10) イスラーム共同体の人々に語りかけている。イスラーム共同体の人々は預言者ムハンマドのような美点を持つ人たちである。

(11) 恋する者たちの心を癒してくれる者である。

(12) ヨーロッパの文化や学芸。

(13) イスラームの意。

(14) イスラーム共同体よと語りかけて、おまえの今の世界にはかつての威厳や偉大さが見られない。

(15) 後半のこの片句はペルシア詩人サーディー(1210頃-92年頃)からの引用と言う説もあるが不明である。

(16) あわてている。

(17) この片句もサーディーからの引用と取る人もいるが、不明である。

(18) 灯火の恋人である。

(19) イスラーム共同体の者よ、アッラーと預言者ムハンマドへの愛の中で、蛾のように逃げずに、宮殿を作れ。

(20) 預言者のメッセージを実行し、榮譽ある人生を送れ。

(21) わが心、すなわちイクバルの心はイスラーム共同体を恋人にしているので、美女のキリスト教徒にはうんざりする。

(22) ヨーロッパの文化。

9. わが友は敵の見せびらかしを話した  
そして<sup>(18)</sup> 巻髪や顔つきのことを話した。
10. わが友は酌人の家の戸口に跪拝した  
そして<sup>(19)</sup> その酌人の話を語った。
11. だがわたしは<sup>(20)</sup> おまえの眉毛の剣で殺された  
わたしは埃である、そして<sup>(21)</sup> おまえの道で安心している。
12. わたしは高位の者に賛辞を述べる者でない  
わたしは<sup>(22)</sup> 宰相の前に頭を下げる者ではない。
13. 神力はわたしを詩歌で<sup>(23)</sup> 鏡職人にさせた  
そして神力はわたしに<sup>(24)</sup> アレクサンドロスを必要なくさせた。
14. わが首は誰かの恩恵に耐えられない  
そこで花園で<sup>(25)</sup> わが裳裾は蕾のように縮んでいる。
15. わたしはこの世で短剣のように奮闘する  
そして自分の輝きと鋭さを<sup>(26)</sup> 砥石で研ぐ。
16. わたしは海であるとはいえ、わが波には混乱はない  
わが手の平は<sup>(27)</sup> 渦の(托鉢用の)鉢ではない。
17. わたしは色の覆いであり、芳香ではない  
わたしはそよ風の波の<sup>(28)</sup> 獲物ではない。
18. わたしは存在の火の中で燻である  
<sup>(29)</sup> わが灰がわたしに賜衣を与えた。
19. わが命は<sup>(30)</sup> あなたの戸口へ捧げ物を持ってやって来た  
わたしは<sup>(31)</sup> 悶えの贈り物を持ってやって来た。
20. 水色の青き空から<sup>(32)</sup> 海が滴っている  
わが熱き心の上に絶えず滴っている。
21. わたしはその海を小川より小さい流れにする  
<sup>(33)</sup> それをおまえの花園の庭に流れ込まそうとして。
22. <sup>(34)</sup> おまえは<sup>(35)</sup> わが友の恋人である  
それ故、<sup>(36)</sup> おまえはわが側に心のように存在する。
23. <sup>(37)</sup> 愛が嘆きの基礎をわが胸の中に置くと

<sup>(18)</sup> 表面的な美について。

<sup>(19)</sup> 普通の詩人はそれら西洋の美女に心を奪われた。

<sup>(20)</sup> イスラーム共同体の剣で。

<sup>(21)</sup> イクバルはイスラーム共同体と大きな関係を持っている。

<sup>(22)</sup> 何かの賞のために時の権力者に頭は下げない。

<sup>(23)</sup> 自我や霊的認識を知る者。

<sup>(24)</sup> アレクサンダー大王。古代マケドニアの王(356～323BC)。つぎの逸話がある。ある種の金属を磨き、国境に鏡のように取り付けておくと、それに攻めてくる敵を事前に察知したという。それで鏡の発明家と言われる。そこで神はわたしにその様な力を持つ必要がないようにした。

<sup>(25)</sup> わたしは花園にありながら花となる恩義を受けることを望まないし、受け取らない。

<sup>(26)</sup> 短剣を砥石で研ぐと輝きや鋭さが生じるが、これによりイクバルは自分の精神的な様子を表わそうとしている。

<sup>(27)</sup> 鉢には施し物が無限に入る広さはない。だがわが手の平には精神的なものが無限に入る広さがある。

<sup>(28)</sup> そよ風が吹くと花が開く。そして花園に芳香が広がるので、芳香はそよ風の獲物である。すなわちわたしは世の中のどんな物の獲物にはならない。

<sup>(29)</sup> 物質的にわたしは何にも困らない。

<sup>(30)</sup> イスラーム共同体の戸口へ。

<sup>(31)</sup> わが心の痛みまでイスラーム共同体の栄光のために捧げる用意がある。

<sup>(32)</sup> わが思想が。

<sup>(33)</sup> 川の水で庭の中に花が咲くように、わが思想がイスラーム共同体の中に偉大な感情を生めるように。

<sup>(34)</sup> イスラーム共同体。

<sup>(35)</sup> アッラー(至高神)でもあるし、また預言者ムハンマドでもある。

<sup>(36)</sup> イクバルはイスラーム共同体と自分との関係が限りなく近い関係にあることを示している。

<sup>(37)</sup> 預言者ムハンマドやイスラーム共同体への愛。

- その火はわが心で<sup>(38)</sup>鏡を作った。  
24. 花のように<sup>(39)</sup>わが胸を切り裂く  
おまえの前に<sup>(40)</sup>この鏡をつるす。  
25. おまえが自分の顔の上に目を落すように  
そして自分の<sup>(41)</sup>巻き毛の虜となるように。  
26. わたしはおまえの古い話を繰り返す  
わたしはおまえの胸の<sup>(42)</sup>傷を新しくさせる。

## II

27. 自分自身の民族について分からなくなってしまった者のために  
わたしは<sup>(43)</sup>神の面前に強力な生を求む。  
28. わたしは夜半の静寂の中、嘆くだけ  
世の人は安眠を貪り、わたしは<sup>(44)</sup>号泣。  
29. わが魂は忍耐と安心を欠き  
わが<sup>(45)</sup>苦痛は絶えずあり。  
30. わが一つの願望はそれを血に染めることだった  
わたしが<sup>(46)</sup>それを目の道から外に流し出せるように。  
31. いつまでわたしは<sup>(47)</sup>チューリップのように絶えず燃えているのか  
いつまでわたしは朝から<sup>(48)</sup>露を求めているのか。  
32. わたしはローソクのように自らの上に涙を流している  
わたしはローソクのように長い夜にあきあきしている。  
33. わたしは明るさを増させた、だが自ら細らせてしまった  
わたしは<sup>(49)</sup>そのようにして他のために宴の準備をした。  
34. わたしは一瞬間たりとも胸の痛みから解放されない  
わが週には<sup>(50)</sup>休日の恥らいがない。  
35. 磨り減った体の中でわが魂は  
<sup>(51)</sup>泥にまみれたものである。  
36. 至高神がわが太初の朝を作ってくれた以来  
わが琴の中でわが嘆きが響いている。  
37. 愛の秘密を表わす嘆き  
愛の話の悲哀を語る涙。  
38. <sup>(52)</sup>その嘆きは塵芥に火の性質を与えるもの  
土埃に蛾のような生氣を与えるもの。  
39. 愛にとり<sup>(53)</sup>チューリップのような傷で充分

---

<sup>(38)</sup> 嘆きを映す鏡。

<sup>(39)</sup> イスラーム共同体のかつての偉大さを見せるために。

<sup>(40)</sup> かつての栄光や衰退を示している様子。

<sup>(41)</sup> 恋人を通してかつての栄光を示している。

<sup>(42)</sup> 偉大な過去をイスラーム共同体の中に思い出させるために。

<sup>(43)</sup> イクバルは偉大な過去を持っていたが隷従と不名誉の虜になってしまったイスラーム共同体のために祈る。

<sup>(44)</sup> アッラーの面前で。

<sup>(45)</sup> イスラーム共同体のために、アッラーの前での嘆きや号泣。

<sup>(46)</sup> 血の涙を流せるように。

<sup>(47)</sup> チューリップの中には黒い芯があり、その芯を通して燃えることを指している。

<sup>(48)</sup> 露とは水のことで、火を消す水。

<sup>(49)</sup> イクバルはローソクを例にしてイスラーム共同体への貢献のため努力してきたがその効果は思いどおりにはいかな

い。

<sup>(50)</sup> 休みがなく、いつでもウィークデーなので。

<sup>(51)</sup> 光があってもはっきりと見えないくらい弱々しくなっている。

<sup>(52)</sup> イクバルはイスラーム共同体を心から愛する者であった。それ故、その栄光と威厳のためにいつもアッラーの前で嘆

いていた。(36)(37)も同じである。

<sup>(53)</sup> チューリップの花の芯は黒、それを傷に喩えている。

- その襟に一つの嘆きの<sup>(54)</sup>花で充分。
40. わたしはこの一つの<sup>(55)</sup>花を<sup>(56)</sup>あなたのターバンに飾る  
そしてあなたの<sup>(57)</sup>深い眠りのために最後の混乱を用意する。
41. あなたの土よりチューリップの花園が生じ  
<sup>(58)</sup>あなたの息で春風が生じるように。

## 第 I 章

### 個人とイスラーム共同体との相互関係。

#### I

1. 個人にとり集団との関係は<sup>(1)</sup>祝福である  
そのすべての利点はイスラーム共同体からある。
2. 出来るだけ自らを<sup>(2)</sup>集団と関係づけよ  
そして自由民の活動の輝きとなれ。
3. 預言者ムハンマドの『<sup>(3)</sup>言行録』を命のおまもりとせよ  
悪魔は集団から離れてしまうだろうから。
4. 個人と民族は互いに鏡のようである  
それは<sup>(4)</sup>紐と真珠、天の川と星との関係である。
5. <sup>(5)</sup>個人は共同体から尊敬を得る  
共同体が個々人からなる組織を作る時に。
6. 個人が集団の中に入ると  
広さを求める<sup>(6)</sup>滴は海となる。
7. <sup>(7)</sup>それは古い行状で一杯となる  
<sup>(8)</sup>それはまた過去や将来の鏡となる。
8. <sup>(9)</sup>その存在は過去や未来の両方が互いに結合している  
その時は永遠のように限りがない。
9. その心の中に共同体により成長の情熱がある  
そしてその<sup>(10)</sup>行為の点検も共同体によりある。
10. その存在も民族により、その心も民族によりある  
その外面も内面も民族の恩義によってある。
11. それは民族の言葉で話しをする  
それは民族の祖先の道を歩む。
12. 交流はその熱さによりさらに強まる  
事実、<sup>(11)</sup>個人が共同体の姿を取るまでに。

---

<sup>(54)</sup> 愛には嘆きや号泣が必須である。その強さの程度によりイスラーム共同体との関係の強さが分かる。

<sup>(55)</sup> 嘆き。

<sup>(56)</sup> イスラーム共同体。

<sup>(57)</sup> 努力を忘れ、奴隷の人生を送っている者を覚醒させるために。

<sup>(58)</sup> あなたが目覚め、再びすばらしい過去のような自由で威厳と栄光のある人生を送れるように。

<sup>(1)</sup> アッラーからの。

<sup>(2)</sup> イスラーム共同体。

<sup>(3)</sup> ハディースのこと。

<sup>(4)</sup> 紐と天の川はイスラーム共同体、真珠と星は共同体を構成する個人の意。

<sup>(5)</sup> 孤独の人間、すなわち個人では認識されることもなく尊敬は得られない。共同体を通して認識される時尊敬を得る。

<sup>(6)</sup> 個人の意。

<sup>(7)</sup> 個人

<sup>(8)</sup> それが祖先たちの足跡の上を行くと、その偉大な過去の姿を映す。

<sup>(9)</sup> 対句7を言い換えている。

<sup>(10)</sup> それぞれの行為や興味の感情は共同体を通してある。共同体との関係なしではどんな重要性も名誉もない。

<sup>(11)</sup> 共同体の他の個々人と会うことでその中に大きな成熟が見える。

13. <sup>(12)</sup> 個人の唯一性は多数により強化される  
個々人の多数が共同体により一つになった時に。
14. 何か語がその場より離れてしまうと  
<sup>(13)</sup> 求められている内容の真珠はその懐の中で壊れてしまう。
15. 緑の葉がその木や枝から離れると  
<sup>(14)</sup> 春とのその希望の関係は壊れる。
16. 共同体の<sup>(15)</sup> ザムザムより水を飲まない者は  
歌の炎が琴の中で<sup>(16)</sup> 凍ってしまった。
17. <sup>(17)</sup> 単独の人は目的を忘れてしまう  
その力は<sup>(18)</sup> 分裂の餌食となる。
18. 共同体は個人に互いの関係を知らせる  
<sup>(19)</sup> その中で柔らかい顔はそよ風のようになる。
19. 共同体はそのつげの木のように足を泥に付けさせる  
<sup>(20)</sup> それが自由になるように手足は縛る。
20. 個人が法の規制を受けると  
その手綱なしの鹿は<sup>(21)</sup> 麝香の香りとなる。

## Ⅱ

21. <sup>(22)</sup> おまえは自我と忘我の違いを認識しなかった  
おまえは<sup>(23)</sup> 自分を疑いの中に置いてしまった。
22. おまえの土の中に<sup>(24)</sup> 光の宝がある  
その一つの光線はおまえの<sup>(25)</sup> 知覚の表われである。
23. おまえの贅沢はその贅沢によりある おまえの悲しみはその悲しみと関係がある  
おまえは<sup>(26)</sup> 毎瞬の変化により生きている。
24. 自我は唯一である、二者には耐えられない  
もしわたしがわたしで、おまえがおまえなら、これらすべてその<sup>(27)</sup> お陰である。
25. <sup>(28)</sup> それは自己を確立するものであり、<sup>(29)</sup> 自分自身をなくすことであり、自分の人柄を作ることであり  
そして<sup>(30)</sup> 謙遜しながら媚態の養育をすることである。
26. 火はその<sup>(31)</sup> 情熱で燃え上がる  
これは炎を虜にする火花である。
27. その性格は自由でもあるが束縛でもある

---

<sup>(12)</sup> 個人の存在は共同体との関係に基づいている。

<sup>(13)</sup> 内容が無意味となり、脈絡のないものになる。

<sup>(14)</sup> 個人は誰でも共同体と関係を持たないとその生は不成功に終わり、不首尾にとられる。

<sup>(15)</sup> 聖マシド内にある泉。その泉から水を飲まない者とは共同体から離れている者の意。

<sup>(16)</sup> 影響力がなくなってしまった。

<sup>(17)</sup> 共同体と関係を持たない者。

<sup>(18)</sup> 努力しようとする力がなくなる。

<sup>(19)</sup> その交流の中で個々人の間に同情の感情が生じる。

<sup>(20)</sup> 共同体は個人に交流と拘束を与え、個人に真の自由をも与える。

<sup>(21)</sup> 法の規制はかえって、個人が偉大なる栄光を獲得する場合もある。

<sup>(22)</sup> 現代のムスリムよと呼びかけている。

<sup>(23)</sup> 自分の感情にわれを忘れ、共同体との関係を断ち、その重要性が分からなかった。

<sup>(24)</sup> 自我。

<sup>(25)</sup> その知覚もおまえの理解力と意識を神々しくする。

<sup>(26)</sup> 自我の真実を気づくことでおまえの生は安息と喜びになる。そしておまえの生は偉大さと栄光を得る。

<sup>(27)</sup> 自我のお陰で個性が確立する。

<sup>(28)</sup> 自我。

<sup>(29)</sup> 自分の正体。

<sup>(30)</sup> 共同体との関係に基づいて、忘我の様子をし、謙遜する。

<sup>(31)</sup> 自我の情熱で。

- その部分の中には<sup>(32)</sup>全体をつかむ力もある。
28. わたしはそれが絶えず闘いであるのを見た  
わたしはそれを<sup>(33)</sup>自我とも生とも呼んだ。
29. 自我が自身を孤独から外に出すと  
<sup>(34)</sup>それは集団の騒ぎの中に立つ。
30. その自我の心の中に“<sup>(35)</sup>それ”は絵を集める  
“<sup>(36)</sup>わたし”は自分自身から消える、そして“おまえ”の姿を取る。
31. <sup>(37)</sup>圧力はその権限を終わらせる  
<sup>(38)</sup>愛のお陰でそれを一杯にする。
32. 媚態が媚態である限り、請願は<sup>(39)</sup>少ない  
媚態がふえると、請願もふえる。
33. 自我は<sup>(40)</sup>集団の中で消える  
ちょうど花びらが集まって<sup>(41)</sup>花園となるように。
34. 「<sup>(42)</sup>微妙な言葉は剣のように鋭い  
もしおまえがそれを分からないなら、わが前から消え失せろ」

## 第Ⅱ章

共同体は個々人の集合と混合で生じ、その育成の確認は預言者を通じて完成する。

1. 人々の相互の関係は何に基づき有益なのか  
<sup>(1)</sup>この物語の糸の先端はまったく分からない。
2. われわれは集団の中に<sup>(2)</sup>個人を見る  
われわれはそれを花のように<sup>(3)</sup>花園から摘む。
3. その性質は唯一に傾く  
しかしその保護は集団に帰する。
4. 生の戦闘の火はそれを生の街道で燃やす  
<sup>(4)</sup>それは生の戦場の火である。
5. 人々は互いに慣れている  
真珠のように一つの<sup>(5)</sup>環に通されることに。
6. 生の闘いでそれらは互いの友である  
そして同業者のように過さねばならぬ。
7. <sup>(6)</sup>星々の宴は互いの魅力で堅固である

<sup>(32)</sup> 一つの世界あるいはその体制を自分の目的や願望に従って動かせる力がある。

<sup>(33)</sup> 自我とは人間が、栄光と威厳を得るために絶えず忙しいこと。

<sup>(34)</sup> 自我の人は個人的な慢心がないと心を通して共同体と関係を持つ。

<sup>(35)</sup> 共同体。

<sup>(36)</sup> 自我の人や個人は自分のかわりに共同体を考え始め、共同体の姿を取り始める。

<sup>(37)</sup> 共同体からの制限。

<sup>(38)</sup> 共同体の方へ向かわせる力で個人は共同体の個々人と心の関係を作る。そしてこのようにして共同体全体が愛と友愛の見本ようになる。

<sup>(39)</sup> 存在しないこともある。

<sup>(40)</sup> 自我は一つだけでは重要性がない。いくつもの自我が集まって一つになると重要性が出る。

<sup>(41)</sup> 花園となった時に花びらに価値が出るように。

<sup>(42)</sup> この対句はベルシア文学最大の神秘主義詩人ルーミー（1207～73年）の『精神的マズナヴィー』からの引用。

<sup>(1)</sup> このテーマについてわたしは以前、はっきりと述べたことはない。

<sup>(2)</sup> 個人を集団の一部と考える。

<sup>(3)</sup> もし花園が集団なら、花は個人である。

<sup>(4)</sup> そのようにして集団の全体主義が確立する。

<sup>(5)</sup> 共同体の中に、そこで親交が生じる。

<sup>(6)</sup> 太陽系がないと星々の存在は混乱してしまう。

- そして<sup>(7)</sup> 星々の生は星々の関係で強固である。
8. 隊商の宿营地である 山々が<sup>(8)</sup> そして牧草地も砂漠や丘の麓もすべてが。
9. <sup>(9)</sup> その仕事の縦糸と横糸の力は弱く力なく  
その思想の蓄も開いていず。
10. その雷の楽器は今も音を出さず<sup>(10)</sup> その歌は幕の中で今も歌にならず。
11. 今もそれは探求の訓戒や叱責を得なかった  
そして願望の琴爪の<sup>(11)</sup> 撥音を得なかった。
12. <sup>(12)</sup> 新しい宴には準備がされていない  
その酒では顔は赤くならない。
13. 今も土の緑はそのまま  
今も<sup>(13)</sup> 葡萄のつるの中で血は冷たいまま。
14. <sup>(14)</sup> 今でもその思考は霊鬼や天女がはびこっている所  
自分の考えから逃れることが仕事。
15. <sup>(15)</sup> その静まり返った生は今も狭い平原  
その思考は今も軒の下。
16. 命への恐怖は<sup>(16)</sup> 人間の資本である  
<sup>(17)</sup> 強風だけでも人間の体は震えてしまう。
17. その命は今も強い努力から逃れている  
それは<sup>(18)</sup> 自然の裾野に爪を立てることをしなかった。
18. 自ら土から出るもの、それを取る  
木から落ちてきた果実、<sup>(19)</sup> それを取る。
19. ついに神は<sup>(20)</sup> 預言者を生んだ  
一字で完全な書を書かせるところの。
20. それはつぎのような楽器奏者、自分のメロディーで<sup>(21)</sup> 土の一塊に新しい生を与えるもの。
21. <sup>(22)</sup> 取るに足りないものがそれから光を得る  
そして生のすべての道具が<sup>(23)</sup> そのせいで新しい価値を得る。
22. それは<sup>(24)</sup> 一息で二百の体を生き返らせる  
それは一つの酒杯で幾つもの宴を華やかにする。
23. <sup>(25)</sup> それは目配せをし、命を吹き込む  
多神教が消え、一神教が生まれるまで。

---

<sup>(7)</sup> 共同体なしでは個人にも個々人にも重要性がない。  
<sup>(8)</sup> 人間が分裂したままで共同体の姿を取らず、目的や目的地も一致していない様子。  
<sup>(9)</sup> 個人の仕事。  
<sup>(10)</sup> 共同体の存在が確立しない限り、人間は分裂し、その能力は押し潰されたまま。  
<sup>(11)</sup> 願望獲得のために努力奮闘する力が生じなかった。  
<sup>(12)</sup> 新しい共同体になったとはいへ。  
<sup>(13)</sup> 葡萄より酒ができ、それは熟を生むはず。  
<sup>(14)</sup> その思考には自らの考えがない。  
<sup>(15)</sup> 成熟していない生。  
<sup>(16)</sup> 個人にとっての。  
<sup>(17)</sup> 人間は自分の能力を知らず、ごく普通のことでも忘れてしまう。  
<sup>(18)</sup> 自然の秘密を知ること。  
<sup>(19)</sup> 特別に自分から自分の力を使うことはしない。  
<sup>(20)</sup> アッラーは神について説明し、人類の中に喜びを生む預言者を生んだ。  
<sup>(21)</sup> 人間に新しい生を与える預言者。  
<sup>(22)</sup> 人間が。  
<sup>(23)</sup> 新しく生まれた預言者のせいで。  
<sup>(24)</sup> 預言者の一息で。  
<sup>(25)</sup> 預言者は死者の命のために、キリストの役目を果たす。



24. 先端が天まで届くその糸が  
<sup>(26)</sup> 生の諸部分を一つに合わされるように。
25. それは人々の中に新しい見方を生む  
 そしてそのような山や渓谷に花園を作る。
26. その熱で一つの共同体が<sup>(27)</sup> 芸香の黒い種のように  
<sup>(28)</sup> 叫ぶ者、騒動を起す者となる。
27. 預言者は共同体の心に火花をかける  
<sup>(29)</sup> 共同体の土は炎となる。
28. その足跡は<sup>(30)</sup> 土に洞察力を与える  
 それでその土の粒子を<sup>(31)</sup> シナイ山より輝やかしくする。
29. 裸の知能にそれは衣服を与えた  
 この貧しき者を豊かな者にした。
30. <sup>(32)</sup> それは共同体の燠に自分の端にある風を与えた  
 そして金の中にある<sup>(33)</sup> 偽物を取り出して捨てた。
31. <sup>(34)</sup> 預言者は奴隷の足から鎖を解いた  
 雇主から<sup>(35)</sup> それを引き離れた。
32. 預言者は奴隷に言った おまえは他の奴隷でない  
 おまえはこの容赦しない者より低いことはない。
33. 預言者は彼を目的の方に連れて行ってやった  
 そしてその足に法やきまりをつけてやった。
34. 預言者は神の唯一性を教えてやった  
 それは人間に謙讓の法を教えてやった。

### 第三章

#### イスラーム共同体の基本的な五柱の第一の柱：神の唯一性。

##### I

1. 理性は現象世界において放浪していた  
 理性は神の唯一性によって目的地の方へ足を向けた。
2. さもなければこの<sup>(1)</sup> 哀れなものにとり目的地はどこか  
<sup>(2)</sup> 知覚の船にとり海岸はどこか。
3. 神の人は神の唯一性の秘密をよく知っている  
 この秘密は<sup>(3)</sup> マルヤム章 19 節である。
4. もしおまえがおまえの存在の秘密を知りたいなら  
 おまえの<sup>(4)</sup> 行為によって神の唯一性の効果を確かめよ。

<sup>(26)</sup> 預言者がその高い精神性により、人間の心の中に生の高い目標を与え、唯一の神と関係づけられるように。

<sup>(27)</sup> 邪視を追い払うための、この煙をたく。

<sup>(28)</sup> 預言者の存在が共同体の人々の中に情熱と熱気を生む。

<sup>(29)</sup> その情熱と熱気を持つと、共同体は努力と行為の道に早急に進む。

<sup>(30)</sup> 人間の心。

<sup>(31)</sup> 預言者ムーサーがアッラーにその姿を見せてほしいと頼んだところ、アッラーは姿を見せず、雷光を発した所の山。

<sup>(32)</sup> 預言者は共同体の残り火に自らの風を吹きかけた。

<sup>(33)</sup> 預言者は共同体の中にある悪い物を取り出して共同体をきれいにされた。

<sup>(34)</sup> すべて人間は平等であると預言者は言う。

<sup>(35)</sup> 奴隷を。

<sup>(1)</sup> 理性にとり。

<sup>(2)</sup> この宇宙の真実や景色を気づくことは唯一の神の本体に改宗することで可能である。さもなければ論拠にたよる理性では無力である。

<sup>(3)</sup> クルアーン第 19 章 19 節のことで、次の通りである。「かれは言った。わたしはあなたの主から遣わされた使徒に過ぎない。清純な息子をあなたに授けるために」。

<sup>(4)</sup> もしムスリムが行為によってその精神を表わさないと、神の唯一性を信じることはそのすばらしい効果を示さない。

5. 宗教、知、規則などこれらすべてが<sup>(5)</sup>神の唯一性によりある  
<sup>(6)</sup>力や勢力、威厳もすべての神の唯一性によりある。
6. 世界にとり<sup>(7)</sup>その顕現は驚きを与える  
恋する者にはそれは行動力を与える。
7. そのお陰のもとに、低級の者も高位の者になる  
土のような者も錬金術<sup>(8)</sup>のように、重要性と名誉の保持者となる。
8. 神の唯一性の力は僕を<sup>(8)</sup>取り上げる  
そしてその僕を新しい人間に変える。
9. 神の道で走ることはなお一層速くなる  
その血は血管の中で電流よりも速くなる。
10. <sup>(9)</sup>恐れや疑いは消え 行動は生き生きしてきた  
目は宇宙の中心まで見た。
11. 奴隷の立場が<sup>(10)</sup>堅固になると  
托鉢僧の鉄鉢も<sup>(11)</sup>ジャムシード王の盃となる。

## II

12. <sup>(12)</sup>輝く共同体は体である、そしてその命は<sup>(13)</sup>「神はなし」である  
わが楽器にとりその蛇腹を振らすものは、「神はなし」である。
13. 「神はなし」はわれわれの秘密の資本である  
その糸はわれわれの思考の<sup>(14)</sup>綴じ糸である。
14. この語句が唇から出て心に入ると  
この語句は生にとり<sup>(15)</sup>力を増す。
15. その絵を石が取ると石も心になる  
だがその<sup>(16)</sup>思いで燃えないとその土は泥になる。
16. われわれが心を神は唯一の悲しみの熱で燃やすと  
溜め息一つで<sup>(17)</sup>可能性の積んだ山を燃やした。
17. <sup>(18)</sup>心が胸の中で輝やいた  
その情熱がそれらの鏡を溶かした。
18. その炎はわれわれの血管の中でチューリップのように広がる  
<sup>(19)</sup>その傷以外、われわれの売り物はない。
19. 神の唯一性により膚の黒い人が赤くなる  
そしてそれぞれが<sup>(20)</sup>ウマル・ファールークや<sup>(21)</sup>アブーザルとなる。
20. <sup>(22)</sup>心とは関係があつたり、関係がなかつたりの者の住み処である

---

<sup>(5)</sup> これを信じることで。

<sup>(6)</sup> 個人や共同体における。

<sup>(7)</sup> 神の唯一性を出す力は学者の中にはないので、それを見ると人々には驚きとなる。

<sup>(8)</sup> 一人の人間をこの世で際だった人間にする。

<sup>(9)</sup> 神の唯一性の信仰は確信の人とするので。

<sup>(10)</sup> 人間が自らを最も高い僕と考え、どんな悪の力にも頭を下げなくなると、その者は最も偉大な者となる。

<sup>(11)</sup> 古代ペルシア王が持っていた盃で、全世界を映していたという。

<sup>(12)</sup> イスラーム共同体。

<sup>(13)</sup> 神の唯一性のこと。すなわちアッラーのほかにはなしのことである。

<sup>(14)</sup> 共同体の人々の思考や態度に共通性を生みだすので。

<sup>(15)</sup> 信仰告白をして悪に頭を下げず、神の唯一性だけを考えると。

<sup>(16)</sup> 神の唯一性で。

<sup>(17)</sup> この消えうる世界ではどんな価値あるものも重要性がなくなるといふ力と何物をも頼らない力を得た。

<sup>(18)</sup> 神の唯一性が心の中に浸透すると。

<sup>(19)</sup> イスラーム共同体のすべての財は神の唯一性の考えである。それなしでは共同体の重要性はない。

<sup>(20)</sup> ムハンマドの教友の一人で第2代正統カリフ（在位634～44年）。

<sup>(21)</sup> ムハンマドの教友の一人で、その清貧は有名。

<sup>(22)</sup> 神の唯一性により共同体の個々人は仲間であり、親交の熱情がある。

- <sup>(23)</sup> 愛においては陶醉は同一となる。
21. それ故共同体の存在は<sup>(24)</sup> 心の一つの色でなる  
この胸の仕方は<sup>(25)</sup> 一つの顕現で輝やく。
  22. 民族にとり思考や思想は一つであるべきである  
それらの目的も<sup>(26)</sup> 一つであるべきである。
  23. 共同体の体質においても情熱は一つでなければならない  
その心の中で美醜の基準も一つでなければならない。
  24. 思考の楽器の中に神の熱情が含まれていないと  
この種の思考法は不可能である。
  25. われわれはムスリムであり、<sup>(27)</sup> カリールの子孫である  
もし証拠が欲しいなら、<sup>(28)</sup> クルアーン 22 章 78 節を読め。
  26. 他の民族の運命は祖国と関係がある  
他の民族の教えの基本は色や人種である。
  27. 共同体の本質を<sup>(29)</sup> 祖国を通して見るとはどのような訳か  
風や水そして水について問うとはどういうことか。
  28. 色や人種を誇ることは馬鹿げている  
その教えはやがて<sup>(30)</sup> 体において消滅する。
  29. わが共同体の<sup>(31)</sup> 根拠は少し別である  
この根拠はわれわれの心の中に隠れている。
  30. われわれは存在する、われわれは心を<sup>(32)</sup> 隠れたものにつける  
それ故、<sup>(33)</sup> くだらぬ物に心をつけない。
  31. イスラーム共同体の互いの関係は星々の互いの関係のようである  
この関係は視線のようにわれわれの視線から<sup>(34)</sup> 隠れている。
  32. われわれは矢筒にある鋭い矢のようである  
<sup>(35)</sup> われわれは一つの目を持ち、一つのものだけを見て、一つだけを考える者である。
  33. われらの目的、われらの結果は一つである  
われらの考え方も一つである。
  34. われわれはその恩恵で<sup>(36)</sup> 兄弟である  
<sup>(37)</sup> われわれは一つの言葉、一つの心、一つの命である。

---

<sup>(23)</sup> 人種の違いがなくすべて平等で兄弟である。

<sup>(24)</sup> 共同体の個々人の感情、思考などが一つであること。

<sup>(25)</sup> 神の唯一性。

<sup>(26)</sup> 思考や思想、そして目的が一つであると共同体は堅固となる。

<sup>(27)</sup> 預言者イブラーヒームのこと。

<sup>(28)</sup> 巡礼章 78 節のこと。ここにイブラーヒームからの教義がある。すなわちおまえはおまえの父親であるイブラーヒームの共同体の一員である。

<sup>(29)</sup> 地理的限界で祖国を見ること。

<sup>(30)</sup> 肉体はいつか必ずなくなるので。

<sup>(31)</sup> イスラーム共同体の基礎は神の唯一性にあり色や人種あるいは祖国の考えからは自由である。

<sup>(32)</sup> 神。

<sup>(33)</sup> 物質的なもと関係を持たない。

<sup>(34)</sup> とはいえ、星々の体系は互いに確立している。

<sup>(35)</sup> 共同体の人々の思考、存在、方法は同じ。

<sup>(36)</sup> クルアーン第 3 章 103 節参照。

<sup>(37)</sup> イスラーム共同体に基づき、われわれはこれらの美点を持つ。

## 第IV章

絶望、悲しみ、恐怖はすべての悪の根源である。それらは人間の生活を破壊する。だが神の唯一性こそがこれらの精神的病状を治療するものである。

### I

1. 願望の終わりは死に対する準備である  
人生の強化は<sup>(1)</sup>アッラーの慈悲に対して絶望してはならないということである。
2. 希望の裾野は絶えざる願望で広がる  
それ故絶望は生にとり毒である。
3. 絶望はおまえを墓のように<sup>(2)</sup>狭くなり苦しめる  
たとえおまえが<sup>(3)</sup>アルバンド山であっても、おまえを引き倒すだろう。
4. 無力はその<sup>(4)</sup>恩義の召使いである  
不首尾がその裾に結びつけられると。
5. 絶望は生を眠らせてしまう  
これは力の弱さの証拠である。
6. 絶望の眉墨は命の目を盲目にする  
明るい日が長く暗い夜にさせられるように。
7. その息で生の力が死んでしまう  
生の泉が涸れてしまうように。
8. 絶望した人は悲しみに包まれショールを被ったままとり寝てしまう  
<sup>(5)</sup>悲しみは命の血管に乱切歯となる。
9. 悲しみの獄舎に閉じ込められているおまえよ  
預言者から<sup>(6)</sup>「アッラーは共におられる」の教訓を得よ。
10. この言葉はアブー・バクルを真実の人にした  
この教えは真実の教えで彼を<sup>(7)</sup>酔わせた。
11. 神の喜びにより<sup>(8)</sup>ムスリムは輝やく星のようである  
ムスリムは生の道で<sup>(9)</sup>唇に微笑がある。
12. もし神を信じるなら、悲しみを捨てよ  
物質の多少に<sup>(10)</sup>煩わされるな。

### II

13. 信仰の力はおまえの生の力を増加させる  
それ故、<sup>(11)</sup>「アッラーの友には恐れもなく、憂いもない」の言葉を思い出せ。
14. <sup>(12)</sup>カリームのような者が<sup>(13)</sup>ファラオの方に向う時  
その心は<sup>(14)</sup>「恐れるな」の言葉で強くなれる。
15. アッラーでない者を恐れることは行為の敵である

---

<sup>(1)</sup> アッラーの恵みついてクルアーン第12章87節、39章53節参照。

<sup>(2)</sup> 言行録によれば不信仰の者の墓は狭くて窮屈である。

<sup>(3)</sup> イランの名山。

<sup>(4)</sup> 絶望は人間世界を無力にさせ、努力をさせなくなる。

<sup>(5)</sup> 絶望と悲しみは同じであって人生にとり危険なもの。

<sup>(6)</sup> アッラーは常に人々の側におり見ているの意。すなわち洞窟の中にいたアブー・バクルに預言者ムハンマドが言った言葉、詳細はクルアーン第9章40節参照。

<sup>(7)</sup> 敵に追われていたアブー・バクルはこの言葉で安心した。

<sup>(8)</sup> すべての力をアッラーだけから得ている。それ故その喜びを求めることはアッラーの意志にまかせることである。

<sup>(9)</sup> あらゆる恐れや悲しみからも護られどんな困難にもまごつかない。

<sup>(10)</sup> 神の意志に従うならば、何事にも煩わされない。

<sup>(11)</sup> クルアーン第10章62節参照。

<sup>(12)</sup> 預言者ムーサー。

<sup>(13)</sup> 古代エジプト王。

<sup>(14)</sup> アッラーの言葉でクルアーン第20章68節参照。

- それは人生の隊商にとり<sup>(15)</sup> 盗賊である。
16. <sup>(16)</sup> それにより強力な意志も懐疑的となる  
それにより高い勇気も困惑の獲物となる。
17. それがおまえの土の中にその苗を植えると  
生は自らの表現を止めてしまう。
18. <sup>(17)</sup> その心は弱々しく  
震える心で震える手をしていている。
19. その恐怖は足から歩く力を取ってしまい  
その頭から高い力を奪ってしまう。
20. おまえの敵がもしおまえが恐れているのを見ると  
おまえの花園からおまえを花のように摘み取ってしまう。
21. その剣の刀は鋭く  
その目も短剣のように鋭い。
22. 恐怖はわが足に鎖のようである  
さもなければわが海は<sup>(18)</sup> 百の洪水が起きている。
23. もしおまえの歌が高くならないなら  
おまえの楽器の弦が<sup>(19)</sup> 緩んでいるのだ。
24. 歌が生まれるようにおまえの耳をひねれ  
空にその嘆きで大混乱が起きるように。
25. 恐怖は死の国の密使である  
<sup>(20)</sup> その隠された語は死(マルグ)のミームのようなものである。
26. その密使の目は<sup>(21)</sup> 生の営みを混乱させるものである  
その耳は生の情報を盗むものである。
27. おまえの胸の中にある<sup>(22)</sup> 隠れた悪は  
その真実はもしおまえが正しく見るなら<sup>(23)</sup> 悪である。
28. 追従、狡猾、悪意そして嘘  
これらすべて恐怖によって輝きを増す。
29. その恐怖の衣装は嘘や偽善の幕である  
その裾野は混乱にとり<sup>(24)</sup> 母親の膝である。
30. 勇気で強くなれないものは  
<sup>(25)</sup> 不利に対して喜ばねばならない。
31. 預言者ムハンマドの秘密を理解する者は  
<sup>(26)</sup> 多神教が恐怖の中に隠れているのを見る。

<sup>(15)</sup> 人間の行動力は終わり、人生は無目的になるので。

<sup>(16)</sup> 非アッラーへの恐怖。

<sup>(17)</sup> 非アッラーを恐れる心。

<sup>(18)</sup> たくさんの変革が起きている。

<sup>(19)</sup> 恐怖のせいであり、おまえは勢いが無い。

<sup>(20)</sup> 恐怖の擬人化で、人間の崩壊の原因となる一人の隠された人間としている。

<sup>(21)</sup> 恐怖のせい。

<sup>(22)</sup> 追従、偽善、敵意、嘘などのこと。

<sup>(23)</sup> 恐怖によって、自らの努力の代わりに嘘や偽善を働かせるようになるので。

<sup>(24)</sup> 多くの混乱の生じる所。

<sup>(25)</sup> 恐怖のせいで、不幸や不運に対し対抗できる勇気がないと、人間は不幸などの不利を喜ばねばならない。

<sup>(26)</sup> 預言者ムハンマドはわれわれに神の唯一性を教えてくれた。それに従って行動する人間はどんな偽りの力も恐れないが、それを知らぬ者は恐怖のせいで偽りの力の前に頭を下げたてし多神教を受け入れてしまう。

## 第V章

### 矢と刀剣の会話。

1. 矢は矢筈の舌で<sup>(1)</sup>神の秘密を言った  
矢は合戦中、刀剣に言った。
2. 剣よ、おまえの<sup>(2)</sup>神秘の山の輝きは妖精だ  
預言者アリー・ハイダルの<sup>(3)</sup>ズルフィカールという快刀はおまえの子孫のである。
3. 剣よおまえは<sup>(4)</sup>カーリドの腕の力を見た  
おまえは<sup>(5)</sup>シリアに夕焼けをふりかけた。
4. <sup>(6)</sup>神の怒りの火がおまえ(剣)の資本だ  
天国が一番よい所は<sup>(7)</sup>おまえの陰の中にある。
5. わたし(矢)は空中を飛んでいようと、矢筒の中にあろうと  
どちらにせよ、わたしは<sup>(8)</sup>火の中に包まれているようだ。
6. わたし(矢)は弓から出て誰かの胸の中に入ると  
わたしはその胸の中を見る。
7. もしその胸の中に健全な心臓が  
絶望や恐れから自由でない。
8. わたしはそれをわたしの先端で切り開く  
そしてそれに血の波の服を着せる。
9. しかしもしその中に敬虔なムスリムの清浄さがあり  
その外部が内部の光で輝やくなら。
10. その熱でわが命はとけて  
わたしの矢の穂先は露のようにしたたり落ちる。

## 第VI章

### ライオンと皇帝アーラムギールの物語(皇帝に神のご加護がありますように)。

#### I

1. 世界征服者<sup>(1)</sup>アウラングゼーブ皇帝の聖廟は天のように高く  
それは<sup>(2)</sup>ティムール族の誇りである。
2. イスラームの人々の地位も彼により非常に高い  
預言者ムハンマドのイスラーム法も<sup>(3)</sup>彼により確実に尊重されるようになった。
3. 彼は不信仰と信仰の闘いにおいて  
われわれの矢筒の中にある最後の矢であった。
4. <sup>(4)</sup>アクバル皇帝が蒔いた背教の種は

<sup>(1)</sup> 真実。

<sup>(2)</sup> この山には妖精が住んでおり、山の近くの女性はみな美女だという架空の山であるが、地理学者によればイランのエルブルズ山脈にある山だという。

<sup>(3)</sup> 第4代正統カリフ、アリー・ハイダルが預言者ムハンマドから与えられた剣の名称。

<sup>(4)</sup> 正統カリフ時代の戦士で、シリアを征服した軍師。

<sup>(5)</sup> 将軍カーリドは剣でシリアを血祭りにした。

<sup>(6)</sup> それにより偽善の力が崩壊するので。

<sup>(7)</sup> 不信仰者との聖戦にある。

<sup>(8)</sup> 誰かの胸に突き刺されれば、胸の中で火がつけられた感じがする。

<sup>(1)</sup> ムガル帝国(1526～1858年)の第6代皇帝。在位は1658年から1707年。

<sup>(2)</sup> モンゴルが中央アジアにおいてトルコ化そしてイスラーム化した民族。

<sup>(3)</sup> アウラングゼーブ皇帝は自らもその法律にそって政治を行なった。

<sup>(4)</sup> ムガル帝国第3代皇帝(在位1556～1605年)。当初はイスラーム信仰に篤かったが後半にはその傾向が薄らぐ。

- やがて<sup>(5)</sup>ダーラー・シコーにもその影響が表われた。
5. その原因は、心のローソクは<sup>(6)</sup>胸の中で輝やかなかった  
 イスラム共同体は反乱から守られなかった。
6. 神はインドから<sup>(7)</sup>アラムギールを選んだ  
 剣の達人で托鉢僧であるアラムギールを。
7. 神は宗教の復活のために彼を任命した  
 そしてムスリムの中に宗教の復興を義務と考えた。
8. その剣の電光が<sup>(8)</sup>背教の穀倉を燃やした  
 宗教の灯が再びその宴に生まれた。
9. 自覚を欠く者たちはアラムギールのこの態度を馬鹿にした  
 彼らはアラムギールの知識の広がりを理解しなかった。
10. アラムギールは神の唯一性の<sup>(9)</sup>蛾であった  
 彼は偶像寺院での<sup>(10)</sup>イブラーヒームのようであった。
11. 彼は<sup>(11)</sup>皇帝たちの中で無比であった  
 彼の清貧ぶりはその<sup>(12)</sup>墓からわかる。

## II

12. アラムギールは王冠と王座の飾りになるような人で  
 彼は將軍で支配者そして清貧な托鉢僧であった。
13. ある朝はやく彼は森に散歩に出掛けた  
 忠誠なお伴と一緒に。
14. 朝風に酔って  
 小鳥たちは木々の上で歌っていた。
15. 真理を究めている皇帝は朝の祈りに夢中であった  
 皇帝は<sup>(13)</sup>仮想から真実へ天幕を張った。
16. その間に荒野の方から獅子が現われた  
 その咆哮に天も震えた。
17. 人間の匂いは獅子に人間の存在の手掛りを与えた  
 それはアラムギールの腰に爪をたてた。
18. 皇帝の手はあつという間に短剣を引き抜いた  
 怒った獅子の脇腹を切り裂いた。
19. 皇帝は少しも驚かなかった  
 荒野の獅子は<sup>(14)</sup>カーベットの獅子となった。
20. その出来事の<sup>(15)</sup>後、彼はじっとしてられずまた神に祈った  
 その祈りは<sup>(15)</sup>昇天のようであった。
21. この敵の前でも堅固な心を持ち、自己を無視する心は  
 敬虔なムスリムの心の中にだけあるものである。
22. 神の僕はその主の前では自己をなくし  
 偽りの者の前ではその心は岩のごとく固く。

<sup>(5)</sup> ムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーン（在位1628～1658年）の子供（1615～59年）で文人。神秘主義の追求の中で他宗教の識者とも交流。特にヒンドゥー教に関心を抱く。

<sup>(6)</sup> イスラム共同体の胸。

<sup>(7)</sup> ムガル帝国第6代皇帝オウラングゼーブ（在位1658～1707年）のことで世界征服者の意。その政治的眼識は鋭かった。

<sup>(8)</sup> アラムギールは背教に対し聖戦をした。宗教と愛でイスラム共同体の中に愛をさせた。

<sup>(9)</sup> 求道者。

<sup>(10)</sup> イブラーヒームは一神教者で、カアバ聖殿にあった偶像を壊した。

<sup>(11)</sup> インド中で。

<sup>(12)</sup> 質素な廟。

<sup>(13)</sup> 現世のしがらみを捨てて神の祈りに夢中であった。

<sup>(14)</sup> 敷物となった。

<sup>(15)</sup> 神（アッラー）がいる至高天への旅。皇帝の関心はただ神だけであった。

23. <sup>(16)</sup> 愚か者よ、おまえもこのような心を作れ  
恋人のために <sup>(17)</sup>「駕籠」を差し出せ。
24. <sup>(18)</sup> おまえは自ら負けて自らを得よ  
<sup>(19)</sup> 謙遜の網を広げて媚態を得よ。
25. 神への愛でおまえの知を燃やしてしまえ  
神の前では <sup>(20)</sup> 狐のようになれ そうすればおまえが獅子のようになる。
26. <sup>(21)</sup> 神の恐れとは信仰の題である  
他者への <sup>(22)</sup> 恐怖とは隠れた多神教の原因からである。

## 第Ⅶ章

### イスラーム共同体の基本的な五柱の第二の柱：預言者の使命。

1. 預言者イブラーヒームは <sup>(1)</sup> 沈むものを捨てる人だった  
彼の足跡は他の預言者たちの道標となった。
2. 彼は永遠の神のしるしだった  
そしてその心の中に彼は一つの <sup>(2)</sup> 共同体の願望を持っていた。
3. 彼の眠りなき目から涙の小川が流れた  
彼は「<sup>(3)</sup> わが家を訪ずれる人のために清くしなさい」の神のメッセージを聞いた。
4. われわれのために <sup>(4)</sup> 彼は人の住めない場所を住めるようにした  
そして <sup>(5)</sup> タワーフのために家を建てた。
5. <sup>(6)</sup> 棗椰子の若木が芽を出すと  
われらの春が始まった。
6. 至高神はわれわれの身体を作った  
そして預言者はわれわれの存在の中に <sup>(7)</sup> 魂を吹き込んだ。
7. われわれはこの世では意味のない片句のようであった  
預言者によってわれわれは釣合のとれた片句となった。
8. 預言者のお陰でわれわれの創造があった  
預言者のお陰でわれわれの宗教、われわれの法があった。
9. 預言者のお陰でわれわれの何十万、何千万が <sup>(8)</sup> 一つになった  
われわれの部分は <sup>(9)</sup> それぞれ分けることの出来ない部分である。
10. <sup>(10)</sup> お望みの者を導く至高神は  
われわれの周りに預言者による <sup>(11)</sup> 人々の集まりを作った。
11. 共同体の範囲は増大する大海である

---

<sup>(16)</sup> ムスリムよの意。

<sup>(17)</sup> 恋人すなわち神のために。

<sup>(18)</sup> 自らの否定者となり、霊的認識を得よ。

<sup>(19)</sup> 自分の能力を広げて名誉を得よ。

<sup>(20)</sup> 従順となれ。

<sup>(21)</sup> 心の中に神の恐れを懐くことは神の唯一性を得たことの証拠である。

<sup>(22)</sup> 偽りの力を恐れることは自ら多神教を犯すことになる。

<sup>(1)</sup> 一神教の熱愛者のイブラーヒームはクルアーン第 6 章 77 節によれば沈む星を好まなかった。

<sup>(2)</sup> 不信仰や背教、多神教でない共同体、クルアーン第 2 章 128 節参照。

<sup>(3)</sup> カアバ聖殿のこと。クルアーン第 2 章 125 節参照。

<sup>(4)</sup> クルアーン第 14 章 37 節参照。

<sup>(5)</sup> イスラーム教徒がカアバ聖殿を黒石の地点から左方向へ 7 回まわる儀式。家とはカアバ聖殿のこと。

<sup>(6)</sup> 預言者イブラーヒームにより神の前で共同体のために祈りが始まるとイスラーム共同体が生じた。

<sup>(7)</sup> 神の唯一性を信じること。

<sup>(8)</sup> 唯一の共同体となった。

<sup>(9)</sup> 共同体のすべての人がその必要な部分である。

<sup>(10)</sup> クルアーン第 22 章 16 節参照。

<sup>(11)</sup> イスラーム共同体。



- その中心は偉大な<sup>(12)</sup> マッカの渓谷である。
12. われわれは預言者との関係において共同体である  
<sup>(13)</sup> 世界の人々にとりわれわれはメッセージである。
  13. われわれはその海の中から立ち上った  
だが<sup>(14)</sup> 波のように離れていない。
  14. <sup>(15)</sup> 預言者の共同体はマッカ聖域の壁に囲まれた所で  
<sup>(16)</sup> 森のライオンのように咆哮しつづけている。
  15. <sup>(17)</sup> もしおまえがわたしの言葉の真実を知りたいなら  
もしおまえが<sup>(18)</sup> 預言者スィディークの目で見るとなら。
  16. 預言者ムハンマドがおまえの精神力の原因となり  
<sup>(19)</sup> 預言者ムハンマドが神よりもいとおしくなる。
  17. 敬虔なムスリムにとっては預言者が持ってきてくれた<sup>(20)</sup> 天の本とは力で  
その知恵とは<sup>(21)</sup> 共同体にとっての頸動脈である。
  18. 預言者の裾を手から離すことは死である  
そうすることは花のように秋の風で萎むことになる。
  19. 共同体は預言者ムハンマドの息で生を得る  
その朝はその太陽で輝きを得る。
  20. 個人は神により、共同体は預言者ムハンマドより生き  
太陽の輝きで共同体は輝やく。
  21. 預言者によりわれわれは同調し  
<sup>(22)</sup> われわれは親友となり、同じ目的を持つ者となった。
  22. 同じ目的を持つ人の多さが唯一性の姿を取った  
唯一性が強くなると共同体となった。
  23. 多数の存在は唯一性の鎖で強力となる  
ムスリムの唯一性はイスラーム教のお陰である。
  24. われわれは預言者ムハンマドを通して<sup>(23)</sup> イスラームの宗教を学んだ  
われわれはそれにより神の道に<sup>(24)</sup> 松明をつけた。
  25. この<sup>(25)</sup> 真珠は預言者の岸辺のない海原である  
われわれが一致した心でいられるのは預言者の恩恵である。
  26. この神の<sup>(26)</sup> 唯一性が手から離れない限り  
わが存在は永遠にわれらと一緒にあるだろう。
  27. そこで至高神はわれわれの上で、イスラーム法を終らせた

<sup>(12)</sup> カアバ聖殿を指す。

<sup>(13)</sup> 預言者ムハンマドは世界のすべての人にとっての慈悲である。すなわち預言者を通してイスラーム共同体は世界にとり慈悲のメッセージである。

<sup>(14)</sup> 波は普通別々の姿となって消えてしまう。そうでなく共同体の人々は多数にもかかわらず一つの姿になっている。

<sup>(15)</sup> 預言者ムハンマド。

<sup>(16)</sup> イスラーム共同体はどんな力にも恐れずにいる。

<sup>(17)</sup> 対句 15 は対句 16 の仮定である。

<sup>(18)</sup> 初代正統カリフのアブーバクル（在位 632 ～ 34 年）のことでスィディークとは真実な人の意で、彼の称号。

<sup>(19)</sup> ある時預言者ムハンマドがすべての教友に家にある財を持ってくるよう命じた。預言者スィディークが自分の家にある財のすべてを持ってくると神は預言者に自分のために少し残しておいたかと尋ねると、スィディークは神が近くにいれば困らないと答えたという逸話がある。

<sup>(20)</sup> クルアーンの意。

<sup>(21)</sup> 共同体の毎日の生活にとって。

<sup>(22)</sup> 共同体の中にはいろいろな人がいたが、一致することがムスリムの偉大さである。

<sup>(23)</sup> その基礎は神の唯一性で、多神教や不信仰と関係がない。

<sup>(24)</sup> 至高神に近づき得られるの意。

<sup>(25)</sup> イスラーム教のこと。神の最も神聖な性質には限りがないので、岸辺のない海原に喩えている。

<sup>(26)</sup> 共同体における一致団結。

- このようにしてわれわれの<sup>(27)</sup> 預言者の上で預言者を終らせた。
28. われわれの輝きでさまざまな時代の宴を輝やかせた  
預言者ムハンマドが最後の預言者となり、そしてわれらが最後の共同体となっている。
  29. 預言者ムハンマドは酌取り役の仕事をわれわれに委ねた  
そして神が持っていた<sup>(28)</sup> 最後の酒杯をわれわれに与えた。
  30. 預言者ムハンマドの後には預言者なしの考えは至高心の慈悲である  
それは<sup>(29)</sup> ムスタファーの宗教の栄誉となる幕である。
  31. この命令は共同体にとり力の源泉となるものであり  
共同体の唯一性の秘密はそれである。
  32. 至高心はすべての<sup>(30)</sup> 主張の絵を消し去った  
そしてイスラームに永遠の<sup>(31)</sup> 緞じ糸をつけてしまった。
  33. <sup>(32)</sup> ムスリムが非アッラーの者から心を根こそぎにすると  
後にはどんな共同体もないのスローガンを上げた。

---

<sup>(27)</sup> 預言者ムハンマドを最後の預言者として、それ以降どんな者も預言者になっていない。そしてまたイスラーム法も現われていない。クルアーン第5章3節参照。

<sup>(28)</sup> この世での最後の聖典すなわちクルアーンのこと。

<sup>(29)</sup> 預言者ムハンマドの称号。もしムハンマドの後に誰か預言者が来ると、イスラーム共同体とイスラーム教の存在がなくなる。

<sup>(30)</sup> 偽りの主張。

<sup>(31)</sup> 相互の同盟と一致団結を準備した。

<sup>(32)</sup> ムスリムが神の唯一性を完全なものにして、偽りの力を恐れないと表現すると。